

## サラニップ 創刊のあいさつ



昭和23年8月、市立函館博物館として、水産館、先住民族館、地質鉱物標本室を所管し、事務室と収蔵室を図書館内に間借りして発足しました。

間借り人とは絶えず気がねの多いもので、まず家主さんに随分迷惑をかけることを心苦しく思われぬ日はありませんでした。

しかし図書館の職員諸氏は、同僚として常に寛容な態度で遇して下さいとは、まことに有難いことでした。

最大の念願の1軒の世帯主になるためには、独立させてやろうと市の当局や多くの市民が認めて下さるだけの業績をあげねばなりません。それには体力と忍耐を資本として、少ない経費で、莫大な資料を確保出来る考古学的な調査研究を、建設の順序としても第1期の重点事業とするのが適当と考えられました。昭和24年のサイベ沢の発掘の規模と意義は、今考えても記録的な大きなものであったと思います。その年の晩秋、館員2人と共に、リヤカーに資料を積んで、全市の小中学校を毎日廻った1ヵ月半にわたる移動展示会の開催は、函館博物館の展覧会の皮切りとして、生涯忘れることはないでしょう。こうした若さにまかせた一見無茶な試みも、弱体な館員の背後に膺接して、援助の手を差し伸べて下さった博物館建設期成委員会の渡辺熊四郎会長、堤清治郎委員長以下60名の委員の助けがあったからできたのだと思います。昭和25年委員が街頭に立っての募金運動も、博物館の歴史に永く記録されるべき創成期の礎石だったと思います。このような色々な思い出に積み重ねられた17年の星霜は感慨無量の一言に尽きます。

館側としても今日までの博物館活動のすべては、本館完

市立函館博物館長 武内 收 太

成の一点に集中しておりました。昭和30年、五稜郭分館の獲得以来、科学教室を中心とする動き、10年間継続の東京国立博物館からの借り受特別美術展、あるいは年々実施の考古学的発掘調査等、すべて本館完成の悲願につならぬものはありません。それだけに今年度本館完成予算の可決は、我々にとって欣喜雀躍という心境です。

考えてみると記録として留めなければならぬ事柄の連続でありました。惜しいかな経費の都合上、こうした記事をもるべき館報をさへ持てなかったことは、遺憾至極でありました。将来に悔を残してはならぬ。無理をしても、本館完成の希望多い昭和40年を期して、おそまきながら博物館館報を持って、これからの多幸な館の歩みを是が非でも記録しておかねばならぬといった切実な気持ちから、第1号を発行することに踏みきりました。勿論当分は準備のないところからの出発でありますので、チャチなものになるかも知りません。しかし無いよりは、例えちっぽけなものでも新しい前進です。将来の充実に望みをかけて、まず「サラニップ」というアイヌ語を誌名としました。

「サラニップ」とは日本語で「カゴ」又は「手さげ袋」と訳されます。これについては、次頁に姫野学芸員が詳しく解説していますが、日高の沙流地方では「小出し袋」という意味もあるそうです。

そこで、北海道の博物館に関係したことや小さな研究成果などを、この「小出し袋」サラニップにほうり込んでおこうと考えた次第です。

また、小さな記事のひとつひとつが、やがて蓄積され、資料として重要なものになるように編集しようと大いに張切っているしだいです。何とぞ多くの方々の御協力をお願い申し上げます。

どうぞこのサラニップ誌を、御気軽に愛読していただければ幸いです。

## 完成ちかい博物館本館

ことしは工事費として2,700万円が認められ、ながい間待たれていた本館が今年中には完成、一般公開は来春ということになります。1階は研究室・資料収蔵庫・暗室・資料洗濯室など、2階は人類文化と函館の概観を紹介する陳列室・小集会室・事務室・館長室・応接室など、3階は美術・民族関係の陳列室と民族関係の研究室が整備されます。すでに研究室の一部・資料収蔵庫の一部・事務室・館長室などが仕上がっており、いままだ図書館本館に間借りしていた事務室と、五稜郭分館の考古・人類学の研究室はこの2月にほぼ移転を終りました。五稜郭分館は、函館戦争関係資料(1階)と児童自然科学博物館・科学教室としておおほばに陳列替え、整備中です。本館に移転された人文科学関係資料も、この際に近代的な目録システムを採用するべく、整理にこ



つたがえしています。本館の正確な住所・電話番号は次のとおりです。

\* 本館：函館市・青柳町・函館公園内 市立函館博物館  
電話：函館 3-5480

## 研究と資料

### サラニップについて

姫野 英夫

アイヌ語で彼等が日常使用した樹皮製の編袋を「サラニップ」と呼んだ。語原は不明とされ、日本語で「籠」或は「手さげ袋」と訳される。数年来行なわれた東京大学言語学研究室のアイヌ語の方言調査の結果が、昨年「アイヌ語方言辞典」として出版された。この辞典により「サラニップ」は北海道アイヌの共通語であるが、その意味するものは下記のように地域的に差のある事が知られる。

八雲—主として背負う。ブドウ・オヒョウの皮で作る。リュックの様なもの。

幌別—木の皮を編んで作った袋状のもの。

沙流—く幌別に同じ「方言でコダシ」

旭川—く同上「背負ったり下げたりする。」

名寄—く同上「一種の手提げ袋。」

当館の資料は大小2個ある。小型のものがふつう単に「サラニップ」と呼ばれている。高さ17cm、口径15cm程の円錐形のもので尖底土器を思わせる。(写真参照)

昭和35年より3年間、毎年アイヌの繊維工芸の調査に東京の染色家岡村吉右衛門氏が来道していた。同氏が日高地方でアイヌの「サラニップ」製作過程を調査しての帰途、館で親しくお会いしてその結果を伺うことができた。それによると日高の沙流川筋では「サラニップ」を編むのに材料として「シナノキ」の内皮から取った繊維を灰汁で煮たく「チポッペ・ニベシ」を使用している。(知里氏のアイヌ語辞典植物篇には Chi-popte-nipes—我ら、煮立てた、シナ皮の繊維—とある)。その編方はまず底を三ツ組に編んで天井から吊るし、底の方から黒く染めた「シナノキ」の燃をかけた糸で1~2cmごとに編みあげる。底には葡萄蔓を丸めて型にして置き、口のところは2段程三ツ組に編んで編み止める。編む糸は胡桃で染め、鉄分の多い湿地沼に入れて黒くしたものを使用している。編み終わると火山灰の塊を幾つか中に入れて上下に振って灰の塊を中で踊らせ糸を延ばして形を整える。二風谷(にぶたに)の辺ではこの袋を「チエオンケ・サラニップ」と呼んでるとのこと。この言葉はパチラー氏の辞典に「チオシカ・サラニップ (Chioshka-Saranip) 木皮を以て作られた籠」とあるのに該当すると思われる。

以上の様な岡村氏の話と当館の資料とはよく一致す



沙流地方の方言なので、この資料も日高アイヌの使用したものではないかと思われる。

岡村氏によるとこのサラニップの用途は、弁当や手廻りの小道具入れがその主たるものであるとのこと。それ以外には野生植物の採集の時に「サラニップ」の紐を左手の首に下げ右手で採集したものをこの中に入れ、これが一杯になると次に述べる「ポロ・サラニップ」に移すという。又知里氏は「オオバユリ」や「カタクリ」の根をくだけ澱粉を取る時、それを漉すための笊(ザル)の代りに利用したと述べている。

他の一点は「ポロ・サラニップ」と云われ高さ70cm、口径52cm程の円錐形編袋で「サラニップ」同様「シナノキ」の樹皮で編まれたものである。前記「アイヌ語方言辞典」の八雲地方で「背負うもの」又は「リュックの様なもの」と表現された「サラニップ」に当るものであろう。

元来「サラニップ」の寸法は大小様々で、単に大型のものを「ポロ・サラニップ」と云うだけで、形態上両者の間に明確な境界があったわけでないらしい。野生植物の採集を主とした時代には、両者共に小型のもので間合ったが、次第に農耕を行ない栽培植物の収集、運搬に「サラニップ」を使用する様になって、両者共大型になったようである。しかし両者の使用方法はかわらず「サラニップ」を手で持つか又は肩にかけて歩きながら採集して歩き、ものが一杯になると、その都度地面に置いた「ポロ・サラニップ」に移したといわれている。そして収穫が終り、「ポロ・サラニップ」が一杯になると、落の葉その他あり合わせのものを上部にあて、タラと称する背負縄をかけ、それを背負って部落への帰途についていたのである。

### 博物館の陳列 —歴史資料—

さいきん、日本各地では新しい郷土館や博物館がぞくぞくと生まれつつあります。そして函館博物館にも、こうした建設プランをつくるため、見学や問い合わせやらがはっきりなしてきました。だからこうした計画の推進者たちと話し合う機会も多いのですが、この人びとがイメージとして持っているのは、博物館イコール郷土資料倉庫、あるいは古美術ギャラリーという線のように受取れます。

私は普及活動を目的のひとつとしてもつ博物館というのは、現在の時点で各分野(もちろん古美術も含まれます)の研究調査のフロントを、できるだけわかりやすく陳列解説するのが本筋であると考えています。美術品を美術品として眺めるのは、美術館の役目です。博物館では、そうした美術品が、いつ、いかなる人びとの手で、どのような社会的背景あるいは必然のもとに、どのような製作過程で

うまれたのかという所まで考えることが必要でしょう。ところが美術鑑賞の場合、博物館が必要とするこうした詳しい説明配慮は、かえって見る人びとのさまじげにさえなることがあります。こうした点で、地方博物館の計画に大きな悩みが生まれているのです。ひとつの資料をあくまで資料として取扱うか、あるいは古美術品として取扱うかによって、その陳列方法もまったくかえる必要があります。限られたスペースと予算の中で、この二律背反とさえいえる取扱ひ方法をどう統合して人びとの要求に答えたら良いのでしょうか。幸いなことに函館博物館では本館が完成すると、部屋ごとに美術ギャラリー、あるいは歴史室というようにはっきりした性格をあてられる見通しができました。しかしこれは例外といってもよいでしょう。他の地方博物館の人びとはどのようにこの問題を解決していったら良いのでしょうか? 私達も共に考えていきたい問題だと思います。(吉崎昌一)

## 特別展の歩み

さかのぼって見ると、明治12年、日本における地方博物館の最初といわれる、長い歴史をもつ市立函館博物館は、さきに北海道文化財に指定された、函館公園内の水産館と先住民民族館を主流に、また、五稜郭公園内の分館を支流として、函館市文化の一端をになってきた。しかし、その後各地に近代的な博物館施設ができ、歴史のみが古いといって、老舗（しにせ）気取りで、あぐらをかいている因業さでは、とり残されるばかりであるし、その上、斜陽といわれる函館と心中でもしたらどうなることかと、全くせっぱつまったものが迫ってきていた。しかし、幸い昭和25年本館新築工事が着工されたが、市財政の都合とあって、かんけつ的に一進一退すること、15ヵ年の風雪がすぎた。こうして、市民からとやかくの話題をはらんだ、新生の市立函館博物館も、ようやく本年中に完成を見ることになったので、館員はおろか、市民の明るいニュースとして、今や大輪の文化の花が咲くことを待望している。

さて、ここに至るまでの苦難時代にかかわらず、「まだ生きている博物館」として、多彩な事業を計画して、数度にわたって、小展示会を市内各所に公開した。また五稜郭分館附設の中、小学生を対象とする科学教室でも、夏期において、理科作品展示会を開くなど、博物館の在り方について、市民のPRにつとめてきたのである。

さらに、昭和31年度から40年度の今に至るまで、毎年5月の桜花シーズンなどを利用して、東京国立博物館のご後援を得て、国宝・重美を中心とした、時代別による、日本の豪華けんらんたる芸術の粋をあつめて、史蹟五稜郭公園内の分館に公開したのが、この「特別展」の由来となるわけである。

以下ひとつどおり、この展覧の歩みを、年次にしたがって拾ってみよう。

昭和31.	5月10日～21日	日本国宝美術刀剣展 於 分館 東京国立博物館出品	30点
32.	7月9日～14日	日本名槍展 於 森屋百貨店	40点
33.	7月29日～8月3日	日本美術刀剣展 於 今井百貨店	31点
34.	5月2日～17日	日本洋画名作展 於 分館	30点
35.	5月1日～15日	桃山時代美術展	60点

## 市立函館博物館沿革史

(その1)

### <北海道物産縦覧所>

当博物館の沿革は、明治11年・開拓使函館支庁仮博物館という名称で、新設の函館公園内に新築され、同12年5月26日盛大な開館式を行なった現在の博物館水産室の創設に始まる。然し現在まで館に伝わって来た開拓使時代の蒐集資料を整理し、市立函館図書館並びに札幌の北海道史料編集室に残された当時の記録を調べると、館の沿革は水産室の創設より古く、明治8年8月「東京芝山内増上寺旧方丈跡の開拓使東京出張所内に設けられた<北海道物産縦覧所>の創設にまで遡って考える必要がある。

開拓使の博物館建設の気運は明治4年、開拓使が招聘したケブロン氏の建言に基づくものと云われ、開拓使はこれに依って直ちに北海道に於て資料の蒐集に手を付けたが、一応<北海道物産縦覧所>という形で博物館が設けられたのが次に述べるように彼の帰国した年の明治8年8月であった。

北海道大学の前身・札幌農学校もケブロン氏の建言で、

		於 分館	〇
(この展より函館茶道各流特別賛助茶席特設、以後例年後援することになる。)			
36.	4月29日～5月18日	日本民俗展	31展
		於 分館	〇
37.	4月29日～5月20日	中国陶磁展	52展
		於 分館	〇
38.	4月28日～5月19日	室町時代の絵画展	32点
		於 分館	〇
39.	4月29日～5月24日	江戸時代前期絵画名作展	27点
		於 分館	〇
40.	4月29日～5月23日	江戸時代後期絵画名作展	39点
		於 分館	〇

以上、今年で第10回目の特別展も、来年4月開館する新装の本館に移されることになるので、五稜郭分館においては、最終の展覧会となった。とにかく、地方博物館としては、他に見られぬ成果と、絶賛を博してきた特別展は、函館市民が居ながらにして、この恩恵をこうむっていることに、大きな幸福を感じると共に、教養を高める上にも役立つことを、誇示してよいと自負している。

去年の江戸時代前期絵画名作展に、観覧者中の40年配の男子の方が、目録の感想欄に「なかなか立派でした。ちょうど昨夜、棟方志功氏のテレビを見た直後なので、その感を深くしました。日本の芸術といっても、狭いものではなく、何か本ものの芸術の姿にうたれました。こんご、もっと判り易いと思われる、徳川後期のものもよいと思います。主催側の好意に、大変敬意と善意を感じております。よろしく。とあったが、これをみても、いかに充実し、そのつと多くの人々に、深い感銘を与えてきたかが、うかがわれて嬉しい。

おわりに、格別のご支援を下された、東京国立博物館と諸先生方が、荷ほどきから陳列・解説・鑑定に至るまで、まるで博物館講習をうけてでもいるかのように、懇切なご指導をたまわっていることは、館員ひとしくありがたく思っている。また、この特別展の最初から、出品依頼などにつき、東京国立博物館とのかけ橋となり、並々ならぬご尽力をしてくれた、館友の加藤忠夫氏や、函館茶道連盟が引き続き館内に、茶席を特設して、観覧者に憩いを与えて下さったことに、心から感謝のお礼を申しのべたい。

(大垣友雄)

明治5年3月開拓使仮学校と云う名称で、同使東京出張所内に設立された。この仮学校は3年後の明治8年7月に札幌に移され、8月にはその跡に<北海道物産縦覧所>が設置された。その設立の目的は「北海道の物産及び開拓の参考に供すべき物品を展列し衆庶に縦覧せしむ」と明治18年出版の開拓使事業報告に記載されている。その陳列品としては動物228点、植物721点、鉱物82点、製品459点の資料目録が附記されている。これ等の資料は明治6年ウイーンで開催された第6回万国博覧会に出品するため開拓使自身で集めた資料と、ケブロン氏が仮学校のため、アメリカ及びフランスの知人と日本の資料との交換によって集めた植物標本等に依って構成されたと思われる。又前記目録の製品459点には土人衣類、土人靴などと記載されたアイヌ資料が数点あり、その一部は当館に引継がれて現在にいたっている。この資料には一応アイヌ語の名称と採集地が銘記されており、又、採集年代が推定出来ることから学術的に貴重なものといわねばならない。

—この項続く—(姫野英夫)

### 図書紹介・寄贈資料のコーナー

- ◇須田昭義編「人類学読本」A5判、208p.  
ヒトの変異；世代間の変異；個体の時間的変異；性；日本人にみる変異；（執筆：寺田和夫、埴原和郎、岩本光雄、木越邦彦、香原志勢、山口敏、増谷乾）みすず書房 1963.9. ¥.700
- ◇藤本英夫「アイヌの墓」新書判変型、245p.  
アイヌの葬式；アイヌの研究小史；アイヌの盛衰；エゾとアイヌ；北海道の人間の歴史；北海道の墓の系譜；北海道の古人骨；ユーカラの世界；アイヌの成立；日経新書3 日本経済新聞社 1964.9. ¥.240
- ◇徳田御絵「進化学入門」新書判変型、188p.  
一種の問題を中心に一種の多様性；近代生物学の四つの柱；全面進化・特殊進化・退化；生物（種）の発達史；日本の生物相；紀伊国屋新書C-4、紀伊国屋書店 1963.12. ¥.250
- ◇石川元助「毒矢の文化」新書判変型、202p.  
毒矢の文化；アジアの毒矢；アフリカの毒矢；南北アメリカの毒矢；毒矢の歩いた道のり；紀伊国屋新書B-6、紀伊国屋書店 1963.10. ¥.250
- ◇貝塚爽平「東京の自然史」新書判変型、186p.  
東京の自然；武蔵野台地の土地と水；氷河時代の東京；下町低地の土地と災害；東京湾の生いたち；紀伊国屋新書C-8、紀伊国屋書店 1964.10. ¥.250
- ◇神山恵三「気象と人間」新書判変型、202p.  
生気象学の歴史；寒さ；暖房；気象病；山の生気象；紫外線；海の生気象；季節と病気；不快指数；気候順化；紀伊国屋新書C-5、紀伊国屋書店 1964.1. ¥.250
- ◇井尻正二・湊正雄「地球の歴史（改訂版）」新書判、

211p.

地球の誕生；三圏分立；古代緑地；地球の中世；孤状列島；岩波新書554、岩波書店 1965.3 ¥.150

- ◇大林太良「日本神話の起源」新書判、248p.  
神話研究法；あめつちのはじめ；国土と神々の創成；生と死；アマテラスとスサノオ；天地初発からアマテラスまで；出雲の大蛇と小人；高天原から日向へ；日本神話の起源；角川新書151、角川書店 1961・1964再版 ¥.190
- ◇祖父江孝男編「人間科学入門」新書判、239p.  
一人類学の追求する新しい人間像—人間科学（その起源と歴史）；言語（人間の行動におけるその役割）；人間の特性の誕生；人類が生まれるまで、人間への曲りかど（農耕の起源）；家族の発生とその組織への関心；文化とパーソナリティ；宗教とは何かの科学的研究；言語と人間の科学；芸術と人間；文化と環境；人類の進化と病気；人類学の現状と役割；（The Voice of America Forum Lectures "Anthropology Series" より、青柳清孝 青柳真智子訳）ガクテンブックス サイエンス シリーズ 学習研究社 1965.3. ¥.280
- ◇A.E.イエンゼン他「民族学入門」A6判、269p.  
一諸民族と諸文化—民族学の方法と目的；最も古い時代の生活形態；シャーマンとその儀礼；初期農耕・経済と世界像；石造記念物と死者崇祀；牧畜民と遊牧民；聖なる王国；古代ペルー（ある高文化の例）；人間集団の初期形態；自然民族と西洋との対決；民族学と先史学；現代における民族学；（Völkerkunde\* より、大林太良・鈴木満男訳）現代教養文庫S.7 社会思想社 1963.4. ¥.200  
\* "Völkerkunde" は、1959年10月から12月にかけて、ミュンヘンのバイエル放送局から放送された連続講演「諸民族と諸文化」をまとめたものである。

### — 展 乱 会 : テンヤワシヤ —

肝心の本館建築が遅々として進まず、北洋博用済後転用された五稜郭博物館（昭和30年6月）が開館して10年になる。したがって恒例のサクラ祭り・名物の特別美術展も今年で10年を迎えるわけ。

公園のサクラは寄る年波には勝てず氣息エンエン。一方特別美術展は函館茶道連盟のお嬢さん方が花を添えて、発展する一方。昔はニシンの神様（ヤン衆）が北海道に春を運んで来たものだが、五稜郭の春は特別展と共にやって来る。しかしはなやかな特別展も築屋裏は大変なもの。大道具、小道具。土手の看板、茶室の組立、ポスター張りのドタバタ劇。おまけにお役所仕事とあって、館員の苦勞も大変なもの……ゴールデンウィーク、祭日休日一切返上の通し興業と化する。花に浮かれたドンチャン連中横目に切符切りとはなさげなや。展覧会が展乱会になるゆえんである。しかし反面半年の雪国生活から開放された市民は、年に一度日本古来の美術に浸り、命の洗濯も出来ようというもの。

来春は本館が開館するので五稜郭で10年つづいた特別展は今年の「江戸後期」をもってサヨナラシヨウとなる。

(石川)

### — 事務室から —

函館博物館の陳列資料購入費はどの位かと、聞かれて返答に窮する。年僅かに50,000円。0を二つ程間違ったのではないかと疑いたくなる様な予算であって見れば1点の美術品も購入することもままならぬ話である。（西田）

### — 五稜郭博物館だより —

今年も恒例の特別展が4月29日より5月23日まで五稜郭博物館で開催されます。そのあと6月より函館戦争資料と自然科学（鉱物・水産動物・貝類・鳥類・木材・こん虫・天体など）の資料を展示し一部に淡水魚の飼育槽も作りたいた考えです。また児童生徒から親しまれている科学教室は今年で10年になりますが、今回はこん虫ジュニヤクラブ100名、天体ジュニヤクラブ100名を、各小中学校を通じて希望生徒を募集しています。分館では、一般市民が気軽に入館し勉強できるように職員が資料の整備にピッチをあげています。（Noshiro）

### — あ と が き —

\*ながい間お待ちせしました。ようやく博物館報サラニップ創刊号をお届けできるようになりました。

\*サラニップには博物館関係のニュース、資料紹介などのほかに、世界のあちこちでおきた科学トピックスも、また、地方で埋もれている優れた研究なども紹介してゆこうと思います。面白いニュースがありましたら編集部までご一報下さい。

\*本号の執筆者は全部函館博物館員でしたが、次号からは館外の方にも参加していただく予定です。（大垣・吉崎）

### Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ— No.1 1965.5.1.発行  
北海道函館市青柳町・函館公園内（Ph.3-5480）  
市立函館博物館 編集・発行